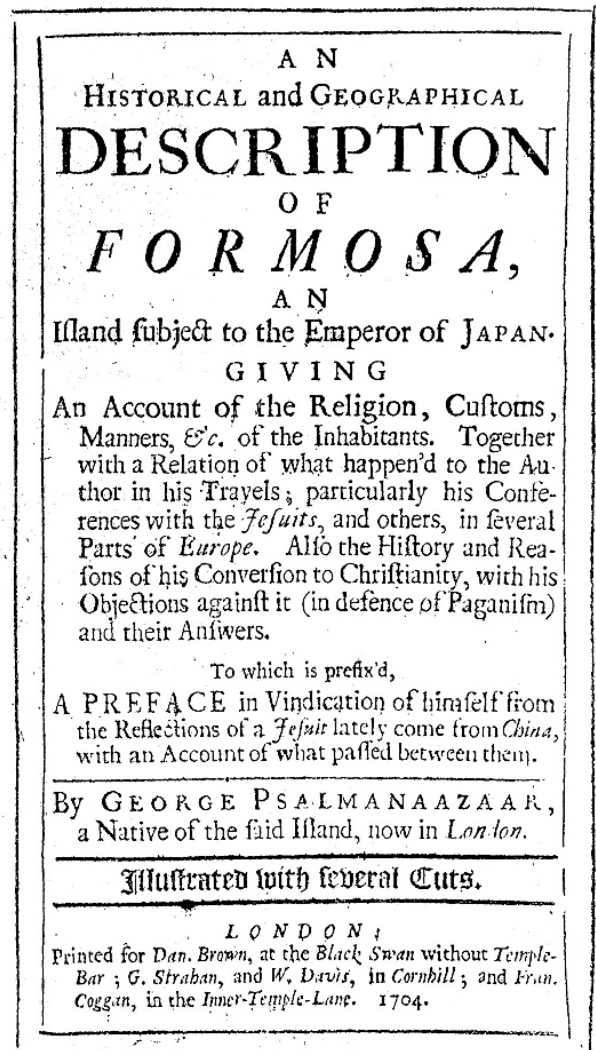


サルマナザールと啓蒙の知のかたち

石倉和佳

1. はじめに

サルマナザール(George Psalmanazar, 1679?-1763)の名は、現在でも文学上の詐欺師として記憶されている。彼の著作として世に出た『台湾(フォルモサ)誌』(*An Historical and Geographical Description of Formosa*, 1704. 一般には『台湾誌』として言及される)¹は、天下の偽書として今でも人々の好奇心を刺激していると言ってよい。1703年にロンドンに現れたサルマナザールを迎えたのは、ロンドン主教ヘンリー・コンプトン(Henry Compton, 1632-1713)であった。ロンドンの彼はキリスト教徒となった台湾(フォルモサ)人として振る舞い、自国の風俗を人々に語り、オックスフォードのカレッジにも招待された。一方、アイザック・ニュートン(Sir Isaac Newton, 1642-1726)を会長に頂く当時の王立協会(The Royal Society)のメンバーは、サルマナザールにインタビューを試み、討論をし、そして彼の言説が虚偽であると結論付けた。しかしそうした「科学的」な検証は、当時の王立協会の中では共有された事実であっても、一般の人々の間には浸透しなかった。というより、情報は今より遥かに多くの言語的、宗教的、地理的、政治的な障壁によってゆがめられ、隠され、あるいは拡大されて伝わった。1704年、『台湾(フォルモサ)誌』が出版された一年後に、早くもフランス語訳とオランダ語訳が出版された。そして続いてドイツ語訳も出された。これらの翻訳とともに、この著書はおそらく出版から200



『台湾(フォルモサ)誌』 初版 1704年

年近く、「本当」か、もしくは「本当かもしれない」アジアの情報として生き延びることになった。

彼の著書には、存在しない人工言語の台湾語のアルファベット表が掲載され、想像上の台湾風俗が記載されている。そして彼自身は、ロンドンの人々の前で、日本の支配下にある台湾の王族と名乗り、生肉を食べて見せ、宗教的儀式を演出し、台湾に関する質問には滔々とよどみなく答えた。サルマナザールはオランダ人にもフランス人にも見える、中肉中背の整った顔立ちの金髪の青年だった。現代の目から見れば、なぜ彼をアジアから来たと人々が信じたかは不思議である。しかし当時「人種」の概念は明瞭ではなく、アジアの人々との直接的交流はほぼなかった。「アジア人」という視覚的プロトタイプはなかったのである²。

現代においても『台湾(フォルモサ)誌』は「天下の奇書」と呼ばれ、彼には「騙りの天才」といったキャッチフレーズがつけられる。しかし、こうした呼び名からは彼の生きた時代の知的雰囲気を読み取ろうとする姿勢は読み取れない。本名も生まれ故郷も一切明かさなかった彼であるが、偽名を用い偽書を世に出すことで何をしようとしていたのか、彼にとって台湾は何だったのか、彼の行動の意味を時代精神において考察することは、むしろほとんどなされていないのである。現代においても『台湾(フォルモサ)誌』についての議論は、そこに描かれた幼児生贄、心臓を抉りだす幼児殺しの風習を与えるスキャンダラスなアジアイメージの周縁を周遊することに留まっているようにさえ見える。

「サルマナザール」は彼の偽名であり筆名でもあるが、現在ではその名は、偽りのアジアを作り上げた何らかの実体に対してつけられた符牒のようにさえ映る。この筆者の求めたものは、ヨーロッパの知的古層に潜む知られざる真実を明らかにする、といったことではなく、知られざる「他者」を、当時の合理的に思われた、もしくは妥当だと評価されうる表現形態によって、ヨーロッパ言語で伝えようとするものの一つの形態であったと考える

方が実態に沿う理解である。そしてその「他者」は、事実に基づいた報告でなくとも、「他者」として理解されうる体裁を備えていれば、そしてその「他者」によって西洋文明の優越が明らかに示されるのであれば、十分許容されるものだったのである。

サルマナザールの書いたものは極東の南部の島の地誌および風俗習慣であったが、19世紀に至るまで、アジアを含むヨーロッパから遠く離れた異国の情報は、「旅行記」や「見聞記」、また「報告書」となってヨーロッパで次々と出版された。メアリー・プラット(Mary Pratt)は、旅行記について著書の巻頭で次のように述べている。

旅行記について私が指摘したいのは、ヨーロッパの読者にとって、探検され、侵略され、投資され、そして植民地化された世界の遠くの地域に関して、所有すること、権利を持つこと、そして親しみを覚えること、という感覚を与えたということである。旅行記は非常に人気があった。旅行記は好奇心や、興奮や、冒険心の感覚を作り出し、またヨーロッパの領土拡張主義に関する確信的な熱狂さえ生みだした。旅行記は、ヨーロッパの「我が家」に居る人々に地球規模のプロジェクトの一員なのだと感じさせる重要な手段の一つだったという点である。それは、いいかえれば、帝国の自国内臣民を作り上げるのに、主要な道具だったのである。

Travel books, I argue, gave European reading publics a sense of ownership, entitlement and familiarity with respect to the distant parts of the world that were being explored, invaded, invested in, and colonized. Travel books were very popular. They created a sense of curiosity, excitement, adventure, and even moral fervor about European expansionism. They were, I argue, one of the key instruments that made people “at home” in Europe feel part of a planetary project; a key instrument, in other words, in creating the “domestic subject” of

empire. (Pratt, 3)

この指摘を別な角度からみると、ヨーロッパの人々が理解可能な形式を持ち、論理的に組み立てられた情報として旅行記を書き得る、もしくは異国の情報をもたらし得る存在は、「帝国」的中心—もしくは情報や知識の中心—と強くつながっているということになるだろう。「旅行記」やその他の報告書の形となってヨーロッパの人々に差し出された文字情報は、すでにその記述の中に政治的かつ経済的な利権を伴う知的ヘゲモニーの中心に取り込まれていくプログラムが埋め込まれているともいえる。ロンドンでサルマナザールを迎えた一人、王立協会事務局長 (Secretary) のハンス・スローン (Hans Sloane, 1660-1753) が、ジャマイカのプランテーションからの経済的利益を得ながら、かつその地の博物誌を旅行記 (*A Voyage to Jamaica*, 1725) として出版したことは、こうした「帝国」的中心への力学の構図をよく物語っている。また、オランダ人ヨハン・ニューホフ (Johannes Nieuhof, 1618-1672) のブラジル、およびバタビア (ジャカルタ) から中国 (北京) への旅行記を考えてもよい。この旅行記は、1660年代に出版されたと同時に英語でも紹介され、その後英国内のシノワズリ趣味を醸成した。そして中国への関心の高まりは、交易を求めるマカートニー (George Macartney, 1737-1806) の使節団という政治的行動となった。歴史的に長い視野で捉えれば、ニューホフの旅行記が世に出たとき、すでにこれら植民地の候補地についての情報は、国家的要請へと展開していくポテンシャルを持ったものであったと見ることができるのである。

では、サルマナザールの場合はどうなのだろうか。合理的な自然の探究によって体系的に世界の事象を知ろうとする知性主義の波は、サルマナザールの生まれた17世紀後半にはすでに広がっていた。サルマナザールの『台湾 (フォルモサ) 誌』は、出版までの経緯には様々な偶然や恣意的な編集などが見られるが、総合

的に見れば、「サルマナザール」という名を自らの自己証明として引き受けた、一人の人物が意欲した何物かを表象している。台湾に関する情報がヨーロッパの人々の耳目を集めるだろうこと、そしてそうした情報は、「帝国」的中心への供物となりうるだろうことは、彼がこの投機的出版事業に関わったことの大きな理由と考えられてよい。本人の改宗の問題とともに、ほとんど知られていない国の風俗、宗教、原語などについて、カテゴリー毎に論理的に理解し得る説明を加えたこの書物は、17世紀から18世紀にかけてヨーロッパで大きな知的潮流となった普遍的知性を求める啓蒙主義の萌芽、もしくはその初期の試みととらえることができるのである³。知的ヘゲモニーの周縁にいとと考えられる地域を、客観的視点で語りうるという立場は、周縁から中心へと自らの立ち位置を移行させる身振り示しているとも見ることができる。

これらを踏まえて本稿では、以下、サルマナザールと『台湾 (フォルモサ) 誌』について、その成立過程をたどりながら詳細に検討する。この本の製作と広汎な受容を可能にさせたのは、18世紀に広く浸透した、「啓蒙の知のかたち」とでもいうべき、記述形式における強度を伴った客観的、論理的記述への強い意欲であることを合わせて跡づけたい。

2. 台湾 (フォルモサ) 人の出現

ジョージ・サルマナザールという人物の記録が客観的に文書等で確認できるのは、1703年以降であり、それ以前の彼の経歴は、本人が後年書き遺した『回想録』 (*Memoirs of Commonly Known by the Name of George Psalmanazar; A Reputed Native of Formosa*, 1764) で語られているのみである⁴。彼は『回想録』においても、本名、国、出身地などを明かさず、人物の固有名や具体的な歴史的事象との関連を詳細には語らなかった。従って、彼の幼年期から青年期を歴史的資料とともにたどることはできない。現在通説としては、フランス南部

の生まれだろうと考えられている。彼が第三者による証言とともに登場するのは、22歳から23歳の頃、スコットランド連隊のラウダー長官 (General, George Lauder) の傭兵隊に入隊していた時期である。連隊はオランダ南西部にあるフランス北部の国境に近いスロイス (Sluis) に駐屯していた。「サルマナザール」という名の異教の日本人として振舞う兵士がいるということを聞きつけたラウダー長官が、興味を持って彼と面会したのである。これは1703年2月のことであった。サルマナザールが記録に残る存在になるのはこのときからである。

この面会に同席していた連隊付きの司祭であったアレクサンダー・イネス (Alexander Innes) ⁵ が、台湾人サルマナザールを世に出した人物であった。イネスは日本人もしくは台湾人と名乗るサルマナザールに目をつけ、利用しようとしていたのである。このイネスとの共謀が、サルマナザールに、『台湾(フォルモサ)誌』の著者でありペテン師としての人生を与えることになる。イネスは1693年ごろ、スコットランドのアバディーン大学を卒業し牧師となった。当時はスコットランドの連隊に司祭として同行していた。イネスにとってサルマナザールを利用することが時を得ていると思われた背景として、ヘンリー・コンプトンが政治的権力の中枢に返り咲いたタイミングであったことが考えられる。ちょうど長官を交えて面会のあった1年ほど前の1702年4月、アン女王 (Queen Ann, 1665-1714) が即位した。ロンドン司教ヘンリー・コンプトンは、反カトリック主義者として知られており、カトリックであるジェームス二世の治世の際には政治の表舞台から退いていたが、その一方で名誉革命を準備するなどの活動をしていた。コンプトンはアン女王の教育係であり、女王にプロテスタント教義を指南していた人物でもあった。長く親しく交流していた間柄であったアンが即位したことで、おのずと彼の政治的地位も高まったのである。コンプトンは以前から、プロテスタント擁護のためフランスから追放されたユグノー (フレンチ・プロテスタント) などの難民に定住地を与えるなどの

活動をしていた⁶。このような経歴を持つコンプトンにアピールする方法を、イネスは思いついたのだと考えられる。すなわち、「フォルモサ」(台湾) からきた異教徒の改宗、という自分の業績に、カトリックに対する敵対心を刺激するストーリーを散りばめて喧伝することである。イネスが必要としたのは、コンプトンやその他関係の人々の注意や関心を引くのに十分な材料であり、おそらくそれによって自らの社会的地位を確かなものにしようとしていたのである。

イネスはサルマナザールと直接話し、彼が本物の台湾人 (もしくはアジア人) ではないことを確かめていた⁷。にもかかわらず、彼は異教徒としてサルマナザールを改心させ、キリスト教徒として洗礼を受けるという行動に出た。二重洗礼は大罪とされていたが、イネスは目的のために手段を選ばない人物だったのである。その時の名親 (godfather) になったのは、ラウダー長官であった。サルマナザールは長官の名をとって、ジョージ (George) と名付けられた。異教を信じていたアジア人が国教会に改宗した、というわけであるが、それに加えて彼は、イエズス会士 (カトリックの修道会士) にヨーロッパまでつれて来られたということになった。『台湾(フォルモサ)誌』には、フォルモサの貴族の子息であったサルマナザールがどのようにヨーロッパに來たのかが旅行記 (The Travels) として書かれている。まず、日本にザビエル (Xaverius) が來た1549年以来、イエズス会士は日本で布教をしていたが、1616年、日本の国王 (the Emperor of Japan) がキリスト教を禁じ、踏み絵によって厳しくキリスト教徒を取り締まった。キリスト教の宣教師たちは素顔を隠し、キリスト者とも外国人とも気づかれないようにして、日本語を学ぶことが出来るインドのゴア (Goa) に行って完璧な日本語をマスターし、再度入国して現地人として偽って暮らした。彼らは完全に日本語を話したので怪しまれず、商人やおもちゃ売りや、教師として過ごした。このような調子で禁教後の日本におけるイエズス会士の状況が語られる中、アヴィニョン

から来た「隠れ」イエズス会士(Father de Rode) から、サルマナザールはギリシャ語を学ぶことになる。このように、事実に照らすと有り得ない状況が次々と語られるのであるが、この記述における要点は、このイエズス会士の戦略的な行動であり、それはサルマナザールをフォルモサからヨーロッパへと連れ去るところに現れる⁸。

日本ではキリスト教を伝えたザビエルや、その他のイエズス会の宣教師に関して、権謀術数を働かせる人物といった印象は一般にはほとんど付随していないが、当時のプロテスタント圏では、イエズス会士の活動は時に疎まれるものであり、策略に満ちたものと思われることが多かった。イギリスにおいても、事情は同じであった。イエズス会士 “Jesuit” という名詞に、「言い紛らす人 prevaricator」「偽人 a dissembling person」(OED)といった意味が残っているのがその一つの証拠である。この理由として、18世紀になると、彼らの世界的な布教活動や、教皇権との強い結びつきが、ヨーロッパ諸国の王権から見て、強い危惧を抱かざるを得ないものになっていたことがある。各地でイエズス会の弾圧が続き、1773年には教皇がイエズス会の活動を禁止することになる。アジアからヨーロッパに拉致されてきた台湾(フォルモサ)人、という設定は、それがイエズス会士の仕業であるとなれば、イギリスではなおのこと同情を引くものだった、というわけである。

イネスの行動とサルマナザールの正体に強い疑念を抱いていた人物が、彼らについての報告を文書で残すことになった。アイザック・ダマルフィ(Isaac d'Amalvi)のフランス語の書物『必然の解明』(*Eclaircissements Necessaires*, 1705)である。ダマルフィはプロテスタントの司祭で、スロイスの町で教会活動を行い、ユグノーの避難民などの世話していた人であった。彼はラウダー長官からイネスとサルマナザールについて聞き、一度はインタビューを行っている。そして、その後二度と姿を現さなくなった二人について、事の顛末とともに、ラウ

ダー長官に宛てた形での文書を、1705年にハーグ(La Haye, Hague) で出版した。サルマナザールはダマルフィについて、『台湾(フォルモサ)誌』の中で触れており(*Formosa*, 1st ed. 33)、ダマルフィはこれに反論したものと考えられる。彼の著作は現在では、サルマナザールへの直接の疑念を表明したものとして、重要な証言となっている⁹。

さて、イネスは早くからコンプトンに手紙を出し、サルマナザールについて報告していたが、それに関する返信はしばらくこなかった。コンプトンに連絡をつけるという計画は、おそらくラウダー長官との最初の面談より早く考えられていたと考えられる。コンプトンはその時アン女王即位の時期で多忙を極めていた。イネスとサルマナザールがコンプトンからの返事を受け取り、ロンドンへと向かったのは1703年の夏である。ロンドンにきたサルマナザールにとって、まず対面したのはコンプトンや周りの紳士たちであったが、その次に現れたのは王立協会の人々であった。彼らは、サルマナザールの語ることが本当かどうか、確かめるために面談を要望したのである。事務局長のハンス・スローンと会い、定例会合に何度か呼ばれて質問を受けることになった。中国に行ったことのあるイエズス会士、フォンタネー(Father Jean de Fontaney) も呼ばれた。サルマナザールの援助者となるペンブローック卿(Thomas Herbert, 8th Earl of Pembroke, 1656-1733) もいた¹⁰。最後に現れたのがハレー彗星の発見で有名なエドモンド・ハレー(Edmond Halley, 1656 -1742)であった。ハレーはあらかじめ中国南東部の天体の動きについて詳細な計算値を出し、サルマナザールに日照や太陽の位置などについての質問を行った。そして、サルマナザールの話す内容は全くあり得ないことであると結論付け、彼は決して台湾(フォルモサ)に行ったことがないはずである、と報告した¹¹。この結論、すなわち「科学的」証明は、王立協会の関係したメンバーには書簡などで伝わったが、話はここまでだった。王立協会は、サルマナザールが台湾人では

ない、台湾に行ったこともない人物であるということを公には明言しなかったからである。一つには、そうだと分かって興醒めした、というもあるだろう。どこの馬の骨ともしれない若者に一杯食らわされた、といったことからである。しかしもっと重要なことは、サルマナザールを紹介したのが、当時女王に最も近い一人であったコンプトンだった、という点ではなかったかと考えられる。権力者のコンプトンが一旦は推奨した人物に対して、何か不都合があったとしても、自分にさして利害のないものであれば、関心を持たないことにすることが得策である。しかも嘘であれば博物学的にも興味を持ち得ない。キリスト教の信仰による救済の物語を、サルマナザールに読みとっていた一般の人々とは異なり、王立協会の人々は神学的熱狂をもたなかった。彼らの「科学」的証明は、真理と受け取られるよりもむしろ、実験的思考の一種と目される傾向が強く、無条件に一般の人々の同意を得られるものでもなかったという面もある¹²。

多くの人々から歓待され、質問され、また疑惑を向けられながら、サルマナザールはロンドンに上陸してから少なくとも見積もっても5年ほどは、台湾(フォルモサ)から来たアジア人として過ごした。とはいえ1711年には、彼がロンドンの知識層の間ではからかいの対象となっていたという証拠が残っている。『スペクテイター』(No.14 March 16) にエイプリル・フールに向けた嘘の広告が載ったが、そこでは次のように登場している。

四月一日には、ヘイ・マーケットの劇場で、「アトレウスの残虐」というオペラが上演されます。注意: テステースが彼の子供を食べるシーンは、最近フォルモサから到着した有名なサルマナザール氏によって演じられます。

On the first of April will be performed at the Play-house in the Hay-market, an Opera call'd 'The Cruelty of Atreus'. N.B. The Scene wherein Thyestes eats his own Children, is to be performed by the famous

Mr Psalmanazar, lately arrived from Formosa. . .
(*The Spectator*, Vol1, 65) ¹³

3. 『台湾(フォルモサ)誌』の成立と改変

1704年の春に、サルマナザールは『台湾(フォルモサ)誌』を執筆したとされているが、この「執筆」が複数の条件下で成立したものであると考えられる点について、整理しておきたい。まず、『台湾誌』は全編英語で記述されているが、当時サルマナザールは英語を十分には使えず、本文中にはラテン語で記述した旨と翻訳者の存在が記述されている。次に、サルマナザールをイギリスに連れてきたイネスは、1703年の秋にはポルトガルへの従軍の辞令が出ていたが、それを1705年の春まで引き延ばしていた¹⁴。すなわち、この本が制作されていた時期にはイギリスに滞在しており、出版に直接かかわることができた。最後に、この本は1705年に第二版が出版されたが、序文にはかなりの加筆があり、同時に本編の構成が変更された。そして第二版より早く出版されたフランス語版では、英語版の初版と異同があり、第二版と共通の部分もある、どちらも完全に同一でないテキストであった。使用言語については、英語版では次のように書かれている。

この取るに足りない著述は、あなた方に良く受け入れられるようなものではないだろうと心配しています。なぜならあなた方が望むような優雅さも洗練もここにはないからです。私はそういったことに弱く、能力もないということを分かっていました。ですので、私の誤りや欠点については、あなた方の許しを与えてくれる善良さに頼っているのです。優雅な表現や言葉の華麗さは、野卑で洗練されていない日本人からは期待できません。私はこの論考をラテン語で書きましたので、これは後に英語になるのだらうと思っています。そして翻訳者に、一切加筆や修正をしないでほしいと言っています。もし不完全なところがあったとしたら、それは私の誤りであって、

翻訳者の間違いではありません。

これはオズワルド氏によってラテン語から英語に翻訳されました。私が英語で書いた94頁から144頁は違いますが、そして別の人の手によって印刷に回されました。

I fear this trifling Performance will not be very acceptable to you, because 'tis not so elegant and polite as you perhaps might wish; I was sensible of my own Weakness and Incapacity for it, and therefore depend upon your Goodness to pardon my Errors, and supply my Defects; elegant Expressions, and pomp of Words, are not to be expected from a raw and unpolish'd Japanese. But since I wrote this Treatise in Latine, that it might be afterwards turn'd into English; and oblig'd the Translator to make no Additions or Alternations, 'tis mine, and not his Fault, if you meet with my Imperfections in it.

It was translated out of Latin by Mr Oswald, except from Page 94. to 144, which part I wrote in English, and was prepar'd for the Press by another Hand. (*Formosa*, 1st ed. xii)

「オズワルド氏」(“Mr Oswald,” xiii) がどういう人物かは分からない。また、途中50頁ほどは英語で書かれたと述べられているが、それは宗教的議論の部分であり、なぜそこだけが英語なのかは示されていない。作者はこの本の文体について必要以上に読者に容赦を願っているが、こういったいささか過剰な謙遜は、彼の著作には散見するものである。自分を「日本人」と述べているのは、「フォルモサ」は日本に従属している国であるため、という理屈であろう。また、そのうち英語にされるのだろう、と書かれたあとで、オズワルド氏によって英語にされ、自分が英語で書いた部分もある、と書いているのは矛盾を含んだ記述でもある。しかも、翻訳者(もしくは共著者)に関しては、フランス語版では、「スコ

ットランドの牧師」(“un Ministre Ecossois,” French ed. 1705, XLIV) と書かれているのである。

以上のことを考えれば、『台湾誌』の製作に関わる人物は複数存在するのは確かだろう。サルマナザールが執筆者の一人であることは間違いないと考えられるが、それに加えて「翻訳者」とされる人物が制作に関与していることも推測される。すでに「翻訳者」とはイネスのことではなかったか、という説もある¹⁵。またこの本の著者がダニエル・デフォー(Daniel Defoe, 1660-1730)ではないか、という噂もあり、その噂は19世紀になってもなかなか消えなかった¹⁶。また、この本が本来何語で書かれたのかも問題である。ラテン語で書かれたと本文に記載されているわけだが、二十歳そこそこの「台湾人」が短期間に書いたにしてはいささか学術的な話であり、サルマナザールの母語と考えられるフランス語で書かれたのではないかという指摘もある¹⁷。しかも、先にも述べたように、フランス語版は再版と同じ編集順で初版とは異同があるなど、新しい版が出るごとに、個々の構成部分が、移動したり改変されたり加筆されたりしている。このように『台湾誌』はテキスト上非常に不明瞭な部分が多い¹⁸。見方を変えれば、一人の作者が全体を監修して制作したというよりも、数種の材料を、サルマナザールと彼の周りにいたイネスら数人が関わって、編集し合成した書物と考える方が妥当である。

それではここで、英語版の構成を確認したい。その後の版に章の入れ替えや、記述上の異同や加筆が多いとはいえ、『台湾誌』の骨格を決めたのはこの初版であり、またもっとも当初の出版の意図を反映しているものであると考えられるからである。この本は次の部分から構成されている。台湾(フォルモサ)の衣服、軍艦、貴族の館などのイラストが入っている。

- 1) 表紙タイトル(前掲)
- 2) コンプトンへの献辞(The Epistle Dedicatory)
- 3) 序文(The Preface) i-xiv

- 4) サルマナザールの旅行記(“An Account of the Travels of Mr. George Psalmanaazaar, A Native of the Isle Formosa, thro’ several parts of Europe; with the Reasons of his Conversion to the Christian Religion”) 1-37
- 5) 作者の改宗の根拠(“The Grounds of the Author’s Conversion”) 37-144
- 6) 台湾(フォルモサ)島の概要 (A Description of the Isle Formosa) By Mr. George Psalmanaazaar 145-327
- 7) 付録 作者のアヴィニョンからローマへの旅について(APPENDIX, concerning the Author’s Journey from Avignon to Rome) 128-131
- 8) 台湾(フォルモサ)島の解説各章の内容(The Contents of the Several Chapters of this Description of the Isle Formosa) 目次となるもの 頁なし (ここでは7の部分は328頁となっている)

これを見てすぐに分かることは、台湾(フォルモサ)島についての記述が後半に置かれ、分量としての全体の半分程であり、その他は4)の旅行記の部分および5)の神学的議論に費やされているということである。また、付録として付けられたローマへの紀行の記述の頁数記載が誤りであり、8)の目次に当たる部分で正しく記載されているところから、版下に頁をつけている段階ではこの部分は前半の旅行記の部分から続くあたりに置かれていたということになる。本文では英語で記述したと書かれている部分が、5)の神学的議論の後半にあたるため、この部分はサルマナザール一人の手になるものかどうか最も疑わしい部分と言えるだろう。

翌年に出版された再版では、サルマナザールが台湾(フォルモサ)人であるか、また彼の言う事が正しいのかといった点についての彼の答弁を書いた新しい序文が追加され、図版も新たに追加された。そして、全体の構成が次のように変わった。明らかに、人々の注目を

集めたフォルモサ島の記述を前半部分に出して、全体を整えたという形である。また、サルマナザールがロンドンに来るにあたって、ラウダー長官など数人が制作したサルマナザールの推薦状も最後に付けられている。

- 1) 表紙タイトル
- 2) コンプトンへの献辞
- 3) 第一版の序文 [ページなし]
- 4) 第二版の序文 [ページなし]
- 5) 台湾(フォルモサ)島の解説各章の内容(目次)
- 6) 台湾(フォルモサ)島の概要 BOOK I 1-172
- 7) サルマナザールの旅行記 BOOK II 173-209 (第一版の7)の部分の内容は校合、改変されている)
- 8) 作者の改宗の根拠 210-288
- 9) 推薦状 (A Recommendatory Letter) [ページなし]

サルマナザールの「フォルモサ」島の文化や政治や経済についての記述はほぼ虚偽であり、かれの言うフォルモサと“Tyowan”(台湾)と呼ばれる島との関係も厳密に見ればよく分からない。それでは実際の台湾島の歴史はどのようなものだったのだろうか。ここで実際の1700年ごろの台湾島の状況を概観してみるのも良いだろう¹⁹。台湾島のオランダ統治時代は、1624年に始まる。オランダ艦隊と中国軍との衝突が起こり、中国が台湾の西の澎湖諸島を移譲する条件で、オランダに台湾の統治を認めたのが始まりである。オランダはゼーランドディア城(Fort Zeelandia)などの要塞を現在の台南の地域に建築して植民地の中心地とした。同時期に、スペインが台湾島最北部を占領したが、オランダは1642年にスペインを駆逐している。オランダ統治時代以前に台湾島に居住していたのは、18種類ほど確認し得る先住民族たちであり、彼らはそれぞれ違う時期に台湾島に移住し、違う文化と言葉を持ち、台湾全土に居住していた。1593年に豊臣秀吉(1537-1598)が入貢を促

したが首尾よくいかなかった記録があるが、これは台湾が統一国ではなく、全土を掌握する政権がなかったことが大きい。また、倭寇などの海賊の隠れ場所として、古くから危険な島とも考えられ、明王朝も領土とは見なさなかったところであった。オランダはこの台湾島で中継貿易を行い莫大な利益を上げたが、同時に中国人の入植を奨励し、サトウキビなどをもたらし、その他多種の農業開発をした。

台湾のオランダ統治が終わるのは、国姓爺、鄭成功(1624-1662)が台湾に攻め入ったことによる。鄭成功の目的は、明滅亡の危機を救い、強力となった満州族の清を滅ぼすことであり、「反清復明(はんしんふくみん)」をスローガンに挙兵した。中国で連戦したが成果をあげられず、1661年、台湾に逃げ込む形で侵攻し、オランダを追放した。鄭成功はこの翌年死去するが、これから1683年まで、鄭氏政権による台湾支配が続く。その後、清朝が台湾支配を行うが、多くの中国本土からの移住民を引き揚げさせ、台湾と本土との交通を制限した。これは、台湾が盗賊、流人、犯罪者などの逃げ込む場所でもあり、福建省などから人が流入し、清朝反対の運動の拠点となったりすることを恐れたためと言われている。ちなみに、サルマナザールは台湾(フォルモサ)島が中国ではなく日本に従属した国であると繰り返し述べているが、これは鄭成功が、父が長崎の平戸に滞在中、日本人の田川氏の娘を妻として生まれた子であるという事実を何がしか想起させるものである。ただし、サルマナザールの『台湾(フォルモサ)誌』には鄭成功は一切登場せず、またオランダ統治以降の歴史との関連が暗示されるような事象も当然ながら記載されていない。オランダ統治時代以降の台湾島の状況は、イギリスの東インド会社の取引においては知りうるものであったかもしれないが、鄭氏政権の崩壊のすぐ後に起こった名誉革命により、オランダのオラニエ公ウィレム三世(Willem I, 1650-1702)がイギリスの王位に就いたことが、オランダおよびイギリスの東インド会社の利

害の衝突をことさら生むこととなった。台湾を一度は統治し、その後も中国とのネットワークと強く持っていたオランダが、その後もイギリスと対立を続けたことで、イギリス側へ十分な情報が入りづらい状態であったと思われる。サルマナザールが登場したのは、ちょうどそのようなイギリスにおける情報の空白期であったと見ることもできる。

4. 啓蒙の知のかたち―描かれた台湾(フォルモサ)

サルマナザールの描き出す台湾(フォルモサ)の事象が如何に現代の目から見ると奇矯であっても、当時イギリスにおいてそれを客観的に証明する情報はほとんど皆無に近かった。そして僅かの情報も、サルマナザール自身が論駁する形で、彼の言説に取り込まれて行った。実際、ほとんど情報のない地域の記述であれば、読者はあらかじめ何の知識も持たないまま読むことになるのであり、一見論理的な構成や、地域の記述がカテゴリー毎に提供されている形式が、この本の信頼性を(誤って)助長することになったとしても不思議ではない。『台湾(フォルモサ)誌』は、それまでに書かれたアジア地域の旅行記や報告書の体裁を上手く利用し、中身はサルマナザールの空想で満ち、挿絵を何枚も使って視覚的にも印象付ける形で、世に出たのである。これは、近代的、合理的な知の形を詐称した、啓蒙書のひとつとしても位置付けることができる。

台湾に関する情報として活字になっていたものに、ジョージ・カンディディウス(George Candidius, 1597-1647)の台湾島の記述がある。カンディディウスはオランダ改革派教会(Dutch Reformed Church)の宣教師で、オランダが台湾統治を始めた初期に当たる、1627年に台湾島南部に渡った。18世紀初頭においても、カンディディウスの報告はオランダ統治時代の台湾を知るための数少ない資料の一つであった。カンディディウスの記述の中で、当時のヨーロッパの人々に特にショッキングな要素として受け取られたのは、女性は36歳もし

くは37歳まで生きた子どもを産むことを禁じられており、身ごもった場合は女官による「子宮の中で嬰兒を殺す」儀式がおこなわれるというところである(*A Short Account*, 531)。一人の女性は17回目に身ごもったこの子は必ず生きて産みたい、と訴えたと言う(531)。また、部族同士の争いによる首狩りの習慣も記述されている。槍の先に敵の生首を突き刺し神への賛歌とともに歓喜の踊りを踊り、そのあと生首は神殿にささげられる(529)。この二つの事象は、その記述が不正確であり、迷信に満ちた別種の事項を示唆していると仮定すれば、一つは産婆や巫女がかかわる出産の際の、部族の人口調整の手段とも考えられ、またもう一つはアジア地域に見られ



『台湾(フォルモサ)誌』フランス語版(1705)に掲載された生贄が捧げられる悪霊の姿(The chief or prince of evil spirits to which Formosans sacrifice, 136)

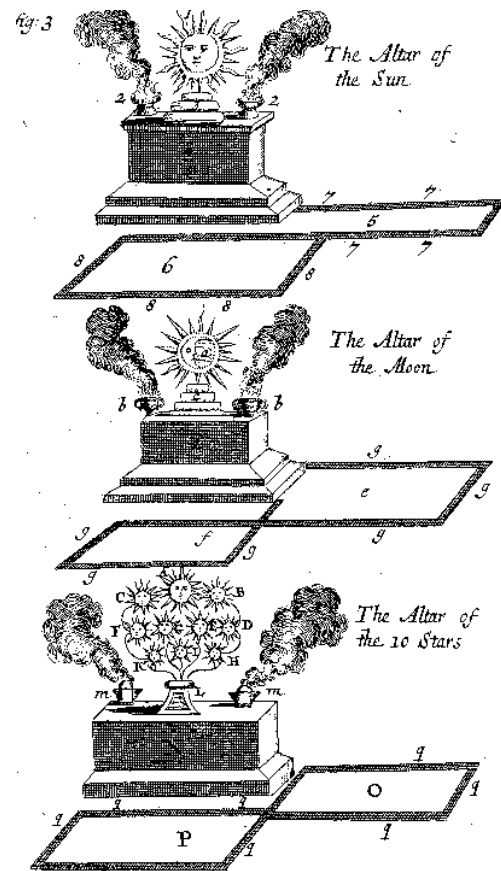
る首狩りや首実検の一例と見ることもできる。現在の目から見れば、カンディディウスの記述は、17世紀の台湾原住民の生態を何らかの形で伝える貴重なものといえるだろうが、原始的な生活形態を理解するには不十分な、いわゆるヨーロッパ的な視点から描かれているのも事実であろう。また、オランダ統治が終わった後の台湾の情報については、ほとんど伝わっていないというのが実情であった。18世紀初頭のヨーロッパで、極東地域の情報が少ない中、カンディディウスの記述は時代的、地域的制約が非常に強いにもかかわらず、「台湾」全体の理解の鍵となるものとして流通したのである。

サルマナザールは『台湾(フォルモサ)誌』の中で、カンディディウスをしばしば引用しながら、台湾(フォルモサ)はオランダではなく日本に従属しているのであり、自分の記述が正しいものである、と繰り返し主張している。これは「権威」と考えられるものをしばしば引用しながら、自分がその誤謬を修正するという行為をすることで、権威の移譲を図る手法であるともいえる。そして、カンディディウスが輪郭を描いた、子殺しと殺戮のテーマは、サルマナザールにおいては九歳以下の子どもを毎年二万人宗教的儀式の中で生贄にするという描写へと変貌し、幼い子どもの心臓を神官が切り出す場面などが語られることになる。このように、読者がもつとも衝撃を受け、好奇心をそそられる事項について、ことさらに誇大化し、劇的に著述することで、関心を引き付けようとしているのである。そしてこうした猟奇的ともいえる宗教的慣習を持つ国を描き出すことは、中国周辺のアジアにある、遠い国の「他」なるものに対する共感を遮断する効果を持っていたとも考えられる。そしてこのような野蛮な国から来たサルマナザール本人が、イギリス国教会に皈依するに至ったという物語は、キリスト教の力の絶対的優越を示す材料ともなるのである。但しこの幼児の生贄については、初版の記述よりも再版のものが詳細であり、さまざまな言説で糊塗されることになる。彼は、それほど毎年子どもを殺したのでは人口激

減ではないか、と問われては、一夫多妻なのだからよいのだと答え、自分のことについては、父親が神官に賄賂を渡して助かった、といった具合に言い逃れを繰り返した (*Formosa*, 2nd ed., 52, 27-29)。

『台湾 (フォルモサ) 誌』にはこのように内容に無理があるところ、曖昧な点や言いつくろっているような点が散見され、数年でサルマナザールを台湾人だと信用する人はほとんどなくなっていた。しかし一方でこの本は、前述したようにフランス語、オランダ語、ドイツ語にも訳されてヨーロッパ各地へ、またアメリカ大陸へと流通することになる。そして海外では、王立協会のインタビューもサルマナザールが実際どのような人物であったかも知れないまま、「台湾」という地域に関する一つの情報として、浸透していくことになるのである。こうしたことを支えたのが、中世からの宗教的議論の要素を強く含みながらも、ピカレスクロマン的旅行記と、「台湾 (フォルモサ)」を事項別に分類して分析・記述している構造をもつこの本が、啓蒙主義時代の趣味にも合致した面を持っていたためであろう。本来、ヨーロッパにとって「他者」である、ほとんど情報のないアジア極東の島の情報というのは、言語や習慣、風土の違いが大きく、たとえ現地に行った人物であっても客観的に分析して記述することはおそらく非常に困難である²⁰。にもかかわらず、『台湾 (フォルモサ) 誌』はその困難をいともたやすく乗り越え、明瞭なテーマ分けによって記述している。となれば、この本の成立について何も知らない読者がその内容に信頼を寄せても全く不思議ではない。

それでは台湾 (フォルモサ) 島の紹介はどのような構成となっているのか。英語版の初版 (1704) のあと、サルマナザールは内容に修正をしており、再版 (1705) では記述が異なっている部分もあるが、おおよその構成は同様である。最初は地理的な提示から始まり、歴史として日本の皇帝 (“the Emperor of Japan”, “Merya-andanoo”) が台湾 (フォルモサ) に侵攻しそこに王を据えた経緯が、日本の皇帝からフォルモサの王 (当時) へ



台湾 (フォルモサ) 人の祭壇 (太陽、月、十の星を奉る, 初版 (193))

の手紙とともに述べられている。その次に、幼児の生贄についての記述が含まれた宗教と宗教儀式、および祝祭日の様子が語られ、祭壇などの絵が示される。続いて、冠婚葬祭などの行事や家族についての記述の後、王や王妃から一般の人々などの装いが、これも絵とともに示されている。人々の様子を記述する項では、位の高い男女はみな美しいが、日光の下で働かないといけない労働者は日に焼けている、と書かれている (Chap. XVIII A Description of the Men in Formosa, 1st ed.)²¹。

台湾 (フォルモサ) の記述においては、金が豊富に取れるなど資源の豊かさが強調されると同時に、熱帯に近い場所の特徴が、病、食物、動物などの項で繰り返して記述される。多くの場合、ヨーロッパから近い亜熱



台湾(フォルモサ)人たちの装束(Figure 230, 初版)

帯や熱帯の地域で観察される状況と類似のもので記述されており、動植物の記述には特にその傾向が強い。レモンやオレンジが生育し、蛇を食すなどである。乾燥しているため麦類は生えず、芋を食し、ブドウでワインを作る。カンディディウスの台湾の記述には、具体的な植物、鉱物資源の説明はほとんどなく、サルマナザールの記述はほぼ彼の空想から生まれたものであるが、一貫しているのが、植民地としての魅力となるもの、また注意点となるものに意識を向けていることである。金については、再版では特に「フォルモサの通商と商品」(“Of the Trade and Merchandise of Formosa, 95-97”)という項で、カンディディウスやその他の人々の記述とは逆に、台湾(フォルモサ)島では金が豊富にとれる、と強調している(2nd ed. 95)。一方『台湾(フォルモサ)誌』には、簡単な地理的描写や食物、作物への言及が

ある他、博物学的な関心からの記述がほとんど見られない。カンディディウスの台湾の記事にそうした描写がほとんどないことも影響しているかもしれないが、先に紹介したニューホフの旅行記には、すでに地誌的な視点で植物の具体的な報告があることを考えると、サルマナザールが参照することができた資料が限定的だったことをうかがわせる。

宗教や社会的営み、生活風習の記述に続いて、特に注目すべきものとしてしばしば言及されるものが、サルマナザールの作りだした台湾(フォルモサ)島の原語である²²。人工言語の一つと見なされることもあるが、ヨーロッパ言語やヘブライ語などからヒントを得て拵え上げた出鱈目のアルファベット(に似た記号)によって成るものである。当然ながら、この原語によって他者に意を通じることはできない。『台湾(フォルモサ)誌』では、この原語(以下フォルモサ語とする)は日本語と基本的に同じで、中国語とももともとは同じであったが、日本人が中国を憎んだために、非常に異なる言語となったとされる。日本語についての知識がなかったことは明らかであり、漢字文化圏についての認識も、またヨーロッパ言語とは異なる言語体系への想像力も、ほぼ感じることができない。サルマナザールはこの原語(らしきもの)を呟いたり話したりしていたと伝わるが、これはコミュニケーションが目的ではなく、そもそも周囲の人に「台湾(フォルモサ)人」であると信じさせるためであった。もしくは、『回想記』で記述されているように、兵士たちの間の宗教的な軋轢を逃れるための方便として、フォルモサ語を呟く行為はコミュニケーションを取らないというサインであったとも考えられる。フォルモサ語について十分に準備することを奨励したのはイネスであるともされているが²³、念の入ったアルファベット表を見ると、サルマナザール自身も『台湾(フォルモサ)誌』執筆当時この原語(らしきもの)への一種の熱中があったのではとは思わせる。17世紀のユートピア文学には、存在しない国の言語が記述されている場合もある²⁴。サルマナ

ザールがそうした事例を知っていたかどうかは不明である。1704年の初版には、「主の祈り」(Lord's Prayer)がフォルモサ語で記述されており、第二版にはアルファベット表が付け加わった。当時の学者もこの原語の発明には非常に関心を示しているようであるが、アジアの言語に関する知識を持たないことへの何らの見解や反省が、現代の研究書に至るまでほとんど見られないことは、ある意味で奇異な現象といえるだろう。

5. 『台湾(フォルモサ)誌』のその後—サミュエル・ジョンソンとビュフォン

『台湾(フォルモサ)誌』の第二版(英語版)が出るかでないかのうちに、イネスはイギリスを去っていた。サルマナザールを「台湾(フォルモサ)人」として迎えたロンドンの人々の熱気はそれから数年で冷めていった。とはいえ彼はそのあとも、しばらくは家庭教師や軍隊の書記などをしながら台湾(フォルモサ)人として暮らしていたようである。イギリスに連れてこられて国教会徒に改宗した気の毒なアジア人、という彼のプロフィールは、しばらくの間は彼に寄附や援助をもたらしたが、そうした暮らしは長くは続かなかった。1714年ハノーバー朝のジョージ一世が即位し、1715年にはルイ14世が逝去した。ジャコバイトの反乱が起こったが、イギリス国内の政治的動乱の時代は過ぎ、内戦のない議会政治の成熟と経済発展の時代に入ろうとしていた。イギリス東インド会社は勢力をのばしていた。サルマナザールは大陸に戻ることなくイギリスに留まり続けた。翻訳の仕事が、彼をロンドンに呼び戻したようである。1728年、サルマナザールが『回想録』を書き始めたが²⁵、この時期から彼は、自分が台湾(フォルモサ)人と偽って生きてきたことに対する謝罪と悔恨の語りを繰り返すことになる。サルマナザールの人生が、ロンドンの文士の群れの中に落ち着こうとしている一方で、『台湾(フォルモサ)誌』は各国で読み続けられた。特にフランス語版は1739年にも再版されている。

The Formosan Alphabet
pag 122.

Name	Power		Figure	Name
A m̄	A a ā		I I I	א א א
Men̄	M m̄ m̄		J J J	מ מ מ
N en̄	N n̄ n̄		U U U	נ נ נ
T aph	T th t		o o o	ת ת ת
L a m̄ do	L ll l		r r r	ל ל ל
S a m̄ do	S sh s		h h h	ס ס ס
V om̄ era	V w u		Δ Δ Δ	ו ו ו
B a ḡ do	B b b		/ / /	ב ב ב
H a m̄ no	H kh h		h h h	ה ה ה
P e d̄ lo	P pp p		τ τ τ	פ פ פ
K a p̄ li	K k x		γ γ γ	ק ק ק
O m̄ da	O o œ		φ φ φ	צ צ צ
I l̄ da	I y i		o o o	ד ד ד
X a f̄ ara	X xh x		z z z	ז ז ז
D a m̄	D th d		z z z	ח ח ח
Z a m̄ pli	Z tl z		h h h	ט ט ט
E p̄ li	E ε η		ε ε ε	י י י
F a u d̄ em̄	F ph f		x x x	כ כ כ
R a w	R rh r		φ φ φ	ל ל ל
G o m̄ era	G g j		φ φ φ	מ מ מ

T. Storer

第二版 (122) 「フォルモサのアルファベット」
“Formosan Alphabet”

その長い人生の中で、サルマナザールは多くの顔を持つ人物となったが²⁶、18世紀後半から19世紀にかけてのイギリスにおいては、ロンドンの文壇における好奇心をそそるエピソードをいくつか提供した人物、もしくは宗教的な改悛者で学識のある人物として記憶されていたようである。この時代のサルマナザールの証言者となったのは、サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson, 1709-1784) であった。

虚偽の書物によって世間を騒がせたことは、ジョンソンがジェイムス・ボズウェル (James Boswell, 1740-1795) にサルマナザールについて語ったとき、おそらく多くの人々にとって遠い出来事であった。ボズウェルはジョンソンが「僕が一番探し回ったのはサルマナザールだよ」(“I sought after George Psalmanazar the most” Boswell,

177) と言うのを聞いていた。「シティの酒場に行って彼の横に座ったものさ」(“I used to go and sit with him at an ale-house in the city,”(Boswell, 177) と、この文壇の大御所は続けた。大陸から来た謎の偽台湾人、もしくはフォルモサ人として一度は世間を騒がせた人物は、すでに老人となってロンドンのシティ界隈の出版関係の人々の伝説となっていたのである。彼の後半生は改宗した国教会徒であり、ときには「さまよえるユダヤ人」(‘the wandering Jew’) と思われ²⁷、シティの北西部の外縁にあるアイアンモンガー・ロー(Ironmonger Row)の一角に住んだ。近隣の酒場の椅子に飲み物を前に座っているこの老人の隣に、おそらくまだ壮年期になるかならないかの年齢だったジョンソンが腰を掛けて話している図は、当時の文学好きにとっては絵になる風景と考えられたかもしれない。ジョンソンにとっては、内乱が頻発したルイ14世の時代のヨーロッパでの遍歴を経て、もうすでに半世紀ほどイギリスのシティ界隈の猥雑さの中にいる老人が、明晰な頭脳のまま静かに暮らしている姿は、そして国教会の教区の一員としてロンドンの暮らしに同化している様は、ロンドンを世界市民の都市としては是認するに足る好ましい情景であっただろう。ジョンソンには、ユグノー(フレンチ・プロテスタント)の人々、ユダヤ人、アイルランドの人々などの難民が母国での困難を逃れてシティ界隈にも移り住んだ時代の、戦争と国境をこえて流入する人々の熱気の名残が、どこかに遠く感じられていたのかもしれない²⁸。

ジョンソンがサルマナザールについて語った言葉としては、ボズウェルの伝記にも残っているが、特に詳細なものとしては、ピョッツィ夫人(Hester Lynch Piozzi, 1741-1821) の『故サミュエル・ジョンソンの逸話』(*Anecdotes of the Late Samuel Johnson*) に登場する。

私 [ピョッツィ夫人] がジョンソン博士にこれまで知っている人の中で誰が一番か、と訊ねた時、「サルマナザール」というのが予期せぬ返答だった。「彼の友人が思

っているようにフランス生まれであっても、彼のような道に陥った他の外国生まれの人の誰よりも、イギリスの国語をマスターしていた」とも彼は言った。尊敬の念は強く見受けられたが、彼らの間には何も内密なことはなかった、と私は信じる。彼らは宗教や学問といった一般的な話題について会話をしていただけだったし、そうした話題には双方とも疑いなくずばぬけていた。真のキリスト者として完全な人という点においては、私はジョンソンがこうに言っているのを聞いた。「あのジョージ・サルマナザールの敬虔さや悔悛、美德は、私たちが聖人の伝記を読んで素晴らしいと思うものをほとんど越えているよ」。

When I asked Dr. Johnson, who was the best man he had ever known? “Psalmanazar,” was the unexpected reply: he said, likewise, “that though a native of France, as his friend imagined, he possessed more of the English language, than anyone of the other foreigners who had separately fallen in his way.” Though there was much esteem however, there was I believe but little confidence between them; they conversed merely about general topics, religion and learning, of which both were undoubtedly stupendous examples; and with regard to true Christian perfection, I have heard Johnson say, “That George Psalmanazar’s piety, penitence, and virtue exceeded almost what we read as wonderful even in the lives of saints.” (173-174)

ボズウェルのものよりも数年早く、1786年に出版されたこの逸話集は、発売と同時にたちまち評判となった。ピョッツィ夫人の伝記のスタイルは、新しい語りのスタイルを作り出したものとして現在では評価されている²⁹。ただし引用した部分においては、前後の文脈が不明瞭で、ジョンソンがどのような点でサルマナザールを一番だと語っているのかはよく分からない。しかしそうしたことはさておき、ジョンソンがサルマナザールの言語能力

を称賛したこと、そして彼が宗教的人物として尊敬すべき存在であると述べたことは、その後もサルマナザールの評価に何がしかの影響を与えることになった。19世紀を通して、ボズウェルのジョンソン伝は読み継がれたが、ピョッツィ夫人の逸話集に書かれた内容も合わせた版も出版されていた³⁰。

サルマナザールがロンドンに上陸したのは1703年、ジョンソンはまだ生まれていなかった。おそらく初めて会った時から、ジョンソンにとってサルマナザールは詐欺師まがいの旅行記作家ではなく、宗教的瞑想にふける伝説の清貧の人であった。三文文士達が集まるグラブ・ストリート(Grab Street)で種々の出版物の雑文を書き、翻訳をしたりする仕事によって、かろうじて暮らしを立てていたが、彼の暮らすセント・ルーク(St. Luke)の教区の中では聖人として尊敬さえ集めていた³¹。ジョンソンはサルマナザールより30歳ほど年下だった。そのジョンソンの言葉を書き取ったボズウェルは、ジョンソンよりまた30歳ほど若かった。ボズウェルがスコットランドからロンドンに出てきて初めてジョンソンに会ったのは1763年5月16日、サルマナザールの死んだのは同年5月3日であった。ボズウェルが出会ったジョンソンにとって、すでにサルマナザールは人々の記憶の中に生きる人であり、ジョンソンのサルマナザール評は、時間と共に何らかの美化もされたようである³²。

さて、ジョンソンが生きた18世紀も半ば近くなると、イギリスの文士事情通が見聞しているサルマナザールの現在と、ヨーロッパ各国、またアメリカでも読まれる『台湾(フォルモサ)誌』の二つは、全く違う世界の現象になっていた。『台湾(フォルモサ)誌』は、サルマナザールの告白や懺悔とは別に情報として利用され続けた。17世紀から18世紀にかけて、各国の東インド会社の活動に示されるように、世界各地へヨーロッパの商人、軍人、行政官などが訪れ、人々の交通が多くなるとそこで行きかう情報の量も増大した。そうした情報は多くの場合、断片化し、元の文脈から切り離され、時には噂のよ

うになり、真偽が定かでないにもかかわらず流通する傾向があった³³。サルマナザールの「台湾(フォルモサ)」の情報が、当時フランスの科学会を中心にいたビュフォン(Georges-Louis Leclerc, Comte de Buffon, 1707-1788)の『博物誌』(*L'Histoire Naturelle*)に登場したのは、そうした事例の一つである。ビュフォンは、台湾島には尻尾の生えた人間がいるという報告について言及した際に、サルマナザールの著作にはそのようなことは書かれていないとして(“L'éditeur des mémoires de Plasmanasar sur l'isle de Formose, ne parle point de ces hommes extraordinaires...” 3:403)、島に暮らす人々の様子を記述している³⁴。特に女性で日の光に当たっていない者は大変白く美しい(“les femmes y sont fort belles et fort blanches,” 3: 403)と述べているが、ここにはサルマナザールの記述の影響がみられることはすでに指摘されている³⁵。18世紀中葉のフランスにおいて、いまだにサルマナザールの情報の真偽が分からないでいると考えて良い。ビュフォンが博物学の権威であれば、その記述を信用する人々も多かったと考えられる。ここで問題は、ビュフォンの記述の真偽というよりは、一旦博物学の大家の著作として纏められたものは、その著者の著述としての価値が高いため、長くそのままの内容で受容される、という点であろう。ビュフォンがサルマナザールの名を記したことは、ありえない台湾島の話が、他の多くの百科事典や旅行書で断片的に引用され、取りとめもなく人々の記憶の断片として蓄積されることになったということを暗示しているのである。

6. 『台湾(フォルモサ)誌』のその後—ディズレーリ

1815年に出版されたウォルター・ハミルトン(Walter Hamilton)による東インド会社の通信誌をまとめたもの(*East India Gazetteer*)は、世界各地域の歴史、民俗、政治状況、産物などが網羅されているが、台湾については鄭氏政権が終了した後の清の支配の段階まで正確に記述されている(356-57)。オランダとの植民地抗

争にも競り勝ち、フランスに対しても戦況において優位に立ったイギリスが、各国（おもにオランダとイギリス）の東インド会社の情報を統合して把握しえたことを示すものである。但し英語で書かれたこの本が、ヨーロッパでどの程度普及したかは不明であり、こうした情報がどの程度共有されていたかも筆者は寡聞にして分からない。少なくとも言えるのは、各国言語に翻訳され流通している『台湾（フォルモサ）誌』の内容は、宣教師の記録、交易に従事する人々の記録など、直接的な記録から見て全く虚偽であることが証明されていたということである。

東インド会社の情報がハミルトンによって纏められ出版された1815年は、ちょうどナポレオン戦争の終結期にあたる。この時期を挟んで、台湾島の情報は以前と比べて明確なものとなったと推測されるが、それはイギリスが中国との貿易による利権に強い意欲を持ち続けたことと相補関係にあると考えて良いだろう。アイザック・ディズレーリ(Isaac D'Israeli, 1766-1848)は文学的読み物で多くの読者を得た作家であるが、『文学珍奇譚』(*Curiosities of Literature*, 1793-1823)³⁶と名付けたエッセイ集を長く書き続けた。この中で彼はサルマナザールに言及しているのだが、1807年までの第一シリーズにある「文学的詐欺」(“Literary Impostures”)というエッセイの中にあるものと、ナポレオン戦争終結後の1823年から始まった第二シリーズにある「文学的捏造」(“Literary Forgeries”)というエッセイの中にあるものでは、サルマナザールについての記述が大きく異なるのである。これは、ナポレオン戦争の終結とともに、イギリスの帝国意識の強度が増したことを、屈折した形ではあるが映し出している一つの事例だろう。まず、最初に書かれた「文学的詐欺」の方では、サルマナザールについての言及は次の通りである。

ジョージ・サルマナザールの労力に、私たちは立派な『普遍史』の多くを負っているのだが、どんな偉大な学のある詐欺師よりも欺く力において彼は優れていた。

彼のフォルモサ島は突出して大胆な幻惑であるが、学識とも言える適切さで主張されており、そしてその学識は偽りの言語とその文法を生み出すほどに偉大であって、そして知られざる人々の歴史を編み出してしまうほどの豊饒なる天才のなせる技なのだ。この欺きは、彼自身の懺悔に満ちた告白によってのみ十分に確かめられたと言われており、かれは最も学識のある者たちを寄せ付けず幻惑させたのだ。

George Psalmanazar, to whose labours we owe much of the great *Universal History*, exceeded in powers of deception any of the great impostors of learning. His Island of Formosa was an illusion eminently bold, and maintained with as much felicity as erudition; and great must have been that erudition which could form a pretended language and its grammar, and fertile the genius which could invent the history of an unknown people: it is said that the deception was only satisfactorily ascertained by his own penitential confession; he had defied and baffled the most learned. (D'Israeli, *Curiosities of Literature*, 45 “Literary Impostures” in Original Articles)

このディズレーリの文章には、サミュエル・ジョンソンのサルマナザールへの称賛が何がかの影を落としていてと見て良い。ここでのサルマナザールはその言語能力の卓越した力が強調され、彼の詐欺的語りは誰にも見破られなかったように書かれている。台湾人と偽り人をだましたことを告白したあと、ロンドンで様々な著作の下請けなどを行って暮した時代、サルマナザールは1736年から20年近くに渡って第二版まで出版された『普遍史』(*An Universal History from the Earliest Account of Time*)に寄稿した。世界各地の国々の歴史を史料に基づき統一的視点で編纂する普遍史の大作の一つであり、現代では読まれることも少ないと考えられるが、18世紀の読者にはなじみのあるものであった。

次は第二シリーズにあるもので、ナポレオン戦争後に書かれたと考えられるものである。ここでサルマナザ

ールに関する記述は非常に多くなり、そのほとんどが彼が台湾人として18世紀初頭のイギリスに上陸し、人々を騙した経緯が、事細かに綴られている。この文章は、ディズレーリが古いエッセイを刷新するにあたって、サルマナザールの『回想録』を参照しているということを示している。

我々の時代の突出した文学的詐称者の中に、ジョージ・サルマナザールという名を装った文学的世界によく知られた男を入れなければならない。彼は懺悔の悔い改めとして自伝を制作した。彼の誠実さが疑われる原因となるような、人の世の動機がすべて失われる、彼がもうこの世になくなるまでは出版しないものとして。この自伝は単調で退屈だが、心に残しておく価値のある独創的な詐欺師の心の進展を、私は好奇心を持って辿ることになった。目の前にある文学的捏造は、当時イエズス会士の報告以外ほとんど知られていなかったフォルモサの改宗した島人となることと、完全に彼の発明である言語と、知られざる人々の歴史と、知られざる宗教とを作り上げることで成り立っていた。

Among the extraordinary literary impostors of our age, . . . we must place a man well known in the literary world under the assumed name of GEORGE PSALMANAAZAAR. He composed his autobiography as the penance of contrition, not to be published till he was no more, when all human motives have ceased which might cause his veracity to be suspected. The life is tedious; but I have curiously traced the progress of the mind in an ingenious imposture, which is worth preservation. The present literary forgery consisted of personating a converted islander of Formosa; a place then little known, but by the reports of the Jesuits, and constructing a language and a history of a new people, and a new religion, entirely of his own invention!

(D'Israeli, *Curiosities of Literature*, 56 "Literary Forgeries")

in Second Series)

これに続けて、ディズレーリは『台湾(フォルモサ)誌』の記述をさらに書き綴る。サルマナザールを責めながら書籍の紹介を丁寧に行っているような、奇妙な緊張感のある文章である。

この男は明らかに南フランス出身であり、イエズス会の地方の学校で学び、そこで彼はイエズス会の日本での発見の数々について多くを聞き、地図を見て、そして彼らが話すことに耳を傾けた。日本人がどのように書くかというやり方については忘れたが、東洋学者が考えるように、彼らは右から左へと書くのだと推測した。それは彼にとっては実践することは難しかったのだが。彼はアルファベットを案出することを始めたが、実際には文字の一つ一つに呼び名をつけることを忘れたために、後になって文士たちの前で困惑することになった。

彼は大失敗に陥った—不注意にもフォルモサ人は一万八千人もの男の幼児を毎年生贄にささげると主張し、その数を決して少なくする事はなかったのである。このような小さな島で、人口減少を伴わずに、そうしたことが行われるのは不可能であると証明された。彼はいったん何かを言ったのであれば、決して意見を変えないのだということをこの虚偽の主張において原則としたのである。全ては、彼の周りにいる人たちに見抜かれないかと恐れながら、大急ぎで考えだされたのだった。

This man was evidently a native of the south of France; educated in some provincial college of the Jesuits, where he had heard much of their discoveries of Japan; he had looked over their maps, and listened to their comments. He forgot the manner in which the Japanese wrote; but supposed, like orientalist, they wrote from the right to the left, which he found difficult to manage. He set about excogitating an alphabet; but actually forgot to give names to his letters, which afterwards baf-

fled him before literary men.

He fell into gross blunders; having inadvertently affirmed that the Formosans sacrificed eighteen thousand male infants annually, he persisted in not lessening the number. It was proved to be an impossibility in so small an island, without occasioning a depopulation. He had made it a principle in this imposture never to vary when he had once said a thing. All this was projected in haste, fearful of detection by those about him.

この第二シリーズで描き出されているのは、18世紀初頭のロンドンで大嘘をついて人を騙した男の話であり、「サルマナザール」という名でさえ、通称というより偽名として扱われている。ディズレーリがサルマナザールについての記事をまったく書き変えたのは、ナポレオン戦争後のイギリスにおいて、中国関係の情報がより詳しく手に入るようになったことも一つであろう³⁷。中国茶やその他物資の貿易が盛んにおこなわれるようになり、事情通の商人も増えていたと考えられるが、そうした中でサルマナザールの描き出す台湾(フォルモサ)島は、これ以上ないほどの虚偽の事実がちりばめられている代物であった。にもかかわらず博物誌の本に取り上げられ、それらしい文字一覧まで作られ、様々な書きものに混入していったとすればどうだろうか。何も知らない人々がこの本の内容を一部分でも信じたとすれば、その現実と虚偽との落差は非常に大きいことになる。大げさにいえば、中国近海に関する情報は嘘で作り上げた本一冊によって攪乱されてしまう危険さえある、とも考えられるのである。かつて『台湾(フォルモサ)誌』が、イギリスに住む人々の間で遠くの異国への興味と何がしかの親近感を掻き立てるものとして読者を得たとすれば、その時のイギリス国民は、まだアジアへの安全な航路さえ手にしていない地域限定的な存在だった。フォルモサ島が嘘であっても、実際のところ実害はほとんどなかった。しかし、100年以上経ったとき、状況は一変し

ていたと考えて良いだろう。世界の航路と港を手中にし、実際にアジアの利権を手に入れようとしている国家にとって、サルマナザールの描き出す台湾は、情報としての価値がゼロという以上に、実害を与えるものとなっていたと考えられる。イギリス国民は、意識するとしないうちに問わず、帝國的な国民意識を育てていたはずである。そうした帝國的国民にとっては、世界についての客観的事実を、その世界の中心において正しく把握していなければ、情報を所有すると言う意味において権力の中心にいたとは言えないからである。

7. どこにもない台湾と日本—ユーロセントリズムの中で

『オックスフォード人物事典』(*The Oxford Dictionary of National Biography*)のサルマナザールの項には、ウィリアム・ラウダー(William Lauder, c.1710- c.1771)、トマス・チャタトン(Thomas Chatterton, 1752-1770)、ジェームス・マクファーソン(James MacPherson, 1736-1796)、そしてリチャード・サベッジ(Richard Savage, c.1654- 1712)といった、偽作や詐称が伝わる人々が18世紀に多く出現したことが言及され³⁸、次のように書かれている。

こうしたねつ造者がこの時代に多く出現したことは、この時期に知識の専門化が拡大したことへの反応だったのだろう。サルマナザールの王立協会との討論、彼の宗教的啓示への擁護、彼の古代ヘブライ文字への熱中は、近代の知の形態への反抗と見なすこともできるのである。サルマナザールの著作は、偽造であるとしても、民族誌の歴史の中にその位置を占めているのである。

The flourishing of such forgers at this time may have been a response to the increased professionalization of knowledge during the period. Psalmanazar's quarrel with the Royal Society, his defense of revelation in religion, and his immersion in ancient Hebrew

may be all regarded as a rebellion against modern forms of knowledge. Psalmanazar's work, despite its fabrication, also has a place in the history of ethnography.

(Robert DeMaria, jun. "George Psalmanazar," *Oxford Dictionary of National Biography*)

こうした見解は、彼の『台湾(フォルモサ)誌』を何らかの形でイギリスの知的伝統の中に位置づけようとする試みの一つと言えるかもしれない。しかし、サルマナザールと王立協会との議論や、彼の宗教的著述やヘブライ語への傾倒は、それぞれ時期の違う出来事であり、個別に総合的な見地から考察されるべきものである。そもそも、『台湾(フォルモサ)誌』がいかに生み出されたのか、なぜ生み出され得たのか、といったこととは話が違わずである。その上、『台湾(フォルモサ)誌』が民族学的に何らかの意味のあるものであるとするのであれば、アジアに関するごく少数の事実と確認できる事項の周りに、ほとんど妄想と幻覚とさえ考えられる言説を全面的に展開させた著述が、20世紀になって成立した民俗学の学問的枠組みとの間に何故近親性を読み取ることができるかを問題にしなければならないだろう。サルマナザールについて現代でも繰り広げられている様々な考察において問題とされるべき第一の点は、そこに17世紀の日本および台湾に関する正確な情報がほとんど盛り込まれていない事実に関心が向けられていないということである。日本や台湾についてどれほど誤った記述がなされていても、それでは正しくはどうだったのか、という視点はほとんど示されない。にもかかわらず、民俗学的な関心事ともなりうる、ということなのだろうか。それはアジアを「他者」とし、或る意味で忌避される実体、むしろ見えないものとして取り扱うヨーロッパ中心主義的心性のもとに、未知の土地の風俗習慣を語る形態としては申し分のない記述形態によって台湾という特定の地域が語られているからそのように考えられるのではないか。

『オックスフォード人物事典』で記述されるサルマナザールの理解は、おそらく現代の平均的な理解の幅を超えていないと考えられるが、この批評的文章の中にも、先に引用した「地球規模のプロジェクトの一員」としての意識—すなわち、ユーロセントリズムに絡め取られた他者としてのアジアへの視線に何の批判も抱かない心性が隠されていると見ても良い。旅行記が、自宅の居間にいながらにして地球規模のスケールで進む帝国主義的な開発と侵略のプロジェクトに参加しているという意識的、無意識的な感覚を与える機序を持つとすれば、そこにある感覚の重要な点は、自らはすでに「所有」する側である、という安心感ではなかっただろうか。そして現在でも、サルマナザールの描くフォルモサ島はすでにヨーロッパの読者によって「所有」されている。つまり、読者の恣意的な意欲によって、どのようにも理解してよいし、大嘘として罵倒してもよいし、人工言語の実例があるといって部分的に拡大して論じても良いものなのである。もともと、対象となる台湾は、「フォルモサ」、すなわち麗しの島であり、実体がなくてもかまわないのであって、そのように対象となるものの非存在の可能性に驚くこともないというところに、ユーロセントリズムに絡め取られた視線から対象となる「周縁」—この場合はアジア—が抜け落ちていく構造が露呈している。そもそもサルマナザール本人からしてアジア人という人間がいること、そしてアジア地域に国があること、が直接的に自分に何かの関係がありうるとはおそらく微塵も思わなかっただろう。何の関係もないことが、彼が台湾人として人を騙すことを保証していたからである。

最後に、サルマナザールについての日本語による考察を紹介して終わりたい。日本語によるサルマナザールの『台湾(フォルモサ)誌』に関する論考は、筆者の知る限り考察に値するものはほとんどないと言ってよいが、一つ例外と思われるものを挙げるとすれば、小説ではあるが陳舜臣の「神に許しを」がある。著者が台湾生まれであるせいか、サルマナザールについては非常に

よく消化されているもので、若干の創作の部分があるとしても、大筋としては現在理解されているところから大きく外れないものである。この小説ではジョンソンが『回想録』の完成に手を貸したということになっている³⁹。

この小説では、台湾について、すべてサルマナザールが風習から言語、教育、食物などについてあらゆることを想像のみで記述した、と書かれているが、大量の幼児生贄の話はイネスが考えだした話として言及されている(225)。そして、仮説としても、またサルマナザールの心情から分かることとしても、これまでほとんど記述されたことがないと思われる点が書かれている。それは、あまりに台湾のことを詳細に文字にしたために、自分もその虚構の世界に引きずり込まれ、「別の台湾人があらわれ、涙を流しながら故郷のことを語り合う場面を、彼[サルマナザール]はよく想像した」(228)というところである。実際のサルマナザールは、もう一人の台湾人が現れることなどは決して望んではいなかった。彼が自らの行動と言葉を最大限に使って関わろうとした啓蒙の知のかたちには、アジア人の同胞との友情の姿はなかった。天下の奇書といわれた『台湾(フォルモサ)誌』にも、他の旅行記と共通する非対称の視線がある。それは、関心の対象となる遠い土地の風物や人々は客体としては実在するが、意識に直接生に語りかけてくる熱を帯びた実体としては存在しないという認識のかたちである。

(本研究はJSPS科研費 基盤B26284042の助成を受けて行われた。)

¹ この本の書名を直訳すれば、「フォルモサの、歴史的地理的解説」となる。和名は『台湾誌』とされる場合が多いが、後述するようにサルマナザールの描いた「フォルモサ」と現実の「台湾島」との接点は限りなく曖昧であるので、本稿では以下、この本を『台湾(フォルモサ)誌』と表記する。フォルモサ(Formosa)という名は、通説では、“Ilha Formosa”、すなわち麗しの島、と台湾の島影を見たポルトガル船の船員が発した言葉からそう呼ばれるようになったとされている。但し、当時「フォルモサ」と呼ばれる島は世界各地に存在した。伊藤『台湾』, 2参照。なお、サルマナザールは『台湾(フォルモサ)誌』(1704)序文で、“Tyowan”とは“it is an Island somewhat remote and distinct from ours [Psalmanazar’s homeland], now a Colony belonging to the before mention’d Dutch”と、彼の言う「フォルモサ」とは離れており、現在オランダの植民地になっている、と述べている。実際にオランダが台湾島から撤退したのは1661年であり、当時台湾の他に東シナ海から日本沿岸にかけてオランダの植民地だった島は存在しない。ともあれ、ここでは「フォルモサ」は、「台湾」とは違うところと述べられているため、本論では架空の存在である「フォルモサ」島として言及する。なお、サルマナザールという著者名の綴りは、当初は“Psalmanazar”ではなく、“Psalmanaazaar”である。

² Kevak, 12, 35-36参照。Hugは、サルマナザールを“Ethnic Impostor”として取り上げている(110-129)。

³ サルマナザールについて、啓蒙主義という知的潮流から考察したもののはほとんどない。ヒュームらに代表される懐疑主義者が論争を起こした際に、彼は啓示の力を擁護する宗教書を書いたことから、懐疑主義に対立する立場と捉えられるようである。Robert DeMaria, jun. “George Psalmanazar,” Oxford Dictionary of National Biography 参照。

⁴ サルマナザールおよび『台湾(フォルモサ)誌』についての研究として、代表的なものにFoley, Swiderski, および比較的最近のものとしてKevakがある。また、Breenのものは『台湾(フォルモサ)誌』を18世紀以降の情報のグローバル化の視点から捉えている。本稿では、サルマナザールの人生についての記述はこれらの先行研究を適宜参考にして構成し、特に必要と思われるところに注をつけている。

⁵ イネスの生没年は正確に分からないが、サルマナザールより数年年上かと考えられる。イネスの経歴については、Foley, 10-11, 37を参照のこと。

⁶ Swiderski, 10参照。

⁷ サルマナザールの回想によれば、イネスはサルマナザールの話すフォルモサ語が偽物であると気づき、キケロの一文を

フォルモサ語に翻訳させ、それを再度繰り返して、サルマナザールが同じ翻訳文を作ることができないのを見て取っていた(*Memoir*, 154-155)。サルマナザールの回想の中で、イネスに関わる記述のうちここは詳細に描き出されている。

⁸ このイエズス会士(Father de Rode) は架空の人物である。Foley は、Alexandre de Rhodes (1591-1660) という中国で布教した実在のイエズス会士から名前を取っているのではないかと指摘している(26)。

⁹ Foleyによると、『必然の解明』は、時折フランス語訳の『台湾誌』と一つに製本されて出版されることもあったようである(42n)。

¹⁰ Foley, 95-96参照。ペンブロック卿は、サルマナザールの詐称が明らかになったあとでも、彼が関係していたSamuel Palmerの『印刷の歴史』(*The History of Printing*, 1732)の出版費用を出している。

¹¹ Forey, 19-20, Swiderski, 40-41, Kevak, 37,137参照。王立協会旧蔵の1705年版の『台湾(フォルモサ)誌』には、次の鉛筆の書き込みが見られる。“This book contains in many particulars the most ingenious imposture on the Publick, but the whole was detected, & the Author brought to shame a very few Questions put to him by the very ingenious late Dr. Halley, who inquired concerning the duration of the Twilight & how long the Sun shone down the Chimney every Year in Formosa. His Philosophy here failing him, he was detected never to have been in the Island”(Foley, 19)。

¹² Foley, 20-21; *Monthly Review*の『回想録』の書評にはこのあたりの経緯について、“It was, therefore, the luckiest thing that could have happened for George, that the Free-thinkers were his first declared opposers”(447)とある。

¹³ この記事は、1711年の記事として一度登場した後は、翌年出版された再版本には収録されなかった。この号の筆者はリチャード・スティール(Richard Steele)である。

¹⁴ Foley, 27参照。

¹⁵ Kevak, 29参照。Kevak は “one cannot help but wonder whether this Oswald is really Psalmanazar’s cohort Innes, and thus to what extent he might have participate^d in the composition of the Description from the start.”

¹⁶ デフォーが作者ではないか、という説についてはStagl, *A History of Curiosity*, 183に概説がある。また、彼の回想録の編集や執筆にサミュエル・ジョンソンが関わったのではないかと、1926年に限定出版された『台湾(フォルモサ)誌』の

編者Penzerは指摘している。どちらの場合も客観的な証拠はないが、サルマナザールの著作と呼ばれるものは、複数の人の手を経て出版されたものが多い。

¹⁷ Swiderski, 103-104参照。Swiderskiは、サルマナザールは最初フランス語で執筆し、それを改訂したものとして、フランス語版の原稿としたのではないかと推測している。

¹⁸ フランス語版も含めたテキストの異同については、Kevak, 30-31に詳しい。

¹⁹ この時代の台湾島の状況については、伊藤潔『台湾四百年の歴史と展望』を主に参考にした。著者は台湾に生まれ後に日本国籍を取得しており、この書は通史のほとんどない台湾島についての貴重な文献ともいえる。

²⁰ この状況は、日本の場合とは大きく異なる。日本の情報は、ザビエルの布教以来、イエズス会士たちの記録、書簡、報告書などによって多く残されており、一つの情報を他の情報で補完、修正することが可能である。こうした情報の多さは、日本に渡航したことのないヴァレニウスが、ポルトガルのイエズス会士による記録とオランダ商人による記録との双方を参照して書いた『日本伝聞記』が、現在においても当時の日本の風俗習慣を知る資料となっていることにも示されている。

²¹ サルマナザールの肌の色が白いことも、王族の一人であり日光に当たっていないからであると説明されていた。

²² Breenは、フォルモサ語の部分は、もっとも独立した情報として切り離しやすく、これだけが他とは別に流布する傾向があったと指摘している。“Elements of Psalmanazar’s language, alphabet, and numerical systems may have lingered longest in learned discourse because of their replicability as units of information”(407)。

²³ Stagl, 181参照。Staglはイネスを「共著者」(co-author)と見てその役割を重要視している。ただし、イネスに関しては、この出版に関わる直接的な資料は、フランス語版で英語版より多く記述されているほかは、詳しいことは伝わっていない。

²⁴ Vairasse, *The History of the Sevarambians*には “Of the Language of the Sevarambians”(376-389)の項目がある。

²⁵ 『回想録』は、サルマナザールの死後1764年に出版された。

²⁶ Swiderskiは、様々な顔を持ったサルマナザールについて次のように述べている。“Psalmanazar then played many parts, simultaneously or in sequence, during his life and afterwards. He was Japanese, Formosan, Frenchman, Dutchman, Jew, student, picaro, refugee, soldier, convert, polemicist, fraud, scholar, hack, en-

trepreneur, penitent, exemplar and elder.”(252).

²⁷ *Monthly Review*, 369-370参照。この『回想録』の書評の著者は、サルマナザールは「さまよえるユダヤ人」ではないと述べている。そのように見られるのは、多くの言語を知りたくさんの国を訪れたためとしている。“...but the general notion that he understood all languages, and had visited all countries, more especially contributed to prove him the very identical wandering Jew” 369 note). ここには、ジョンソンのように、サルマナザールの言語能力を高く評価する姿勢が読み取れる。

²⁸ *The Proceedings of the Old Bailey*, “A Population History of London” を参照のこと。ユグノーの流入は1685年のルイ14世によるプロテスタントの禁止令である、フォンテーヌブローの勅令 (Édit de Fontainebleau) の影響による。

²⁹ *Oxford National Biography*, “Piozzi [née Salusbury; other married name Thrale], Hester Lynch,” by Michael J. Franklin. 参照。

³⁰ Croker 編の19世紀のジョンソン伝が、このようなボズウェルとピョッツィ夫人の双方の書籍に見られる記述を併記する形の編集となっている。

³¹ Swiderski, 223参照。

³² ワーズワスとコールリッジの共同詩集、『リリカル・バラッズ』の初版の出版者であったジョセフ・コトル (Joseph Cottle, 1770-1853) が残したサルマナザールについての随想は、サルマナザールの言語能力を誇大に称賛しており、ジョンソンに見られる肯定的なサルマナザール評の一つに入るが、コトルの記述自体が、フォルモサ語がまったくの空想だとは見破られなかった等、サルマナザールの『回想録』とは異なった記述を行っている。この点において、コトルの随想は、サルマナザールの「偽伝」ともいえるべき奇妙な体裁を持っている。Cottle, *Malvern Hills*, “Life & Characters of Psalmanazar,” 433-448 特に、438参照。

³³ Breen は、この現象をこの時代に特徴的な「認識論的ずれ」(“epistemological slippage”)として、次のように定義している。“the tendency of information to escape its original contexts, becoming reassembled in emerging inscriptive forms like encyclopedias, travel compendia, and natural philosophical treatises.”(393).

³⁴ ビュフォンは*mémoires*としているが、これは死後出版された『回想録』ではなく、『台湾 (フォルモサ) 誌』であることは明白である。また、編者とのべているが、これはフランス語版の序文で翻訳者 (共著者) が言及されているためと考えられ

る。

³⁵ Breen, 405及び Kevak 28を参照のこと。

³⁶ このエッセイ集のタイトルの邦訳は「文学の愉しみ」「文学よもやま話」などさまざまに付けられている。

³⁷ George Macartney によるイギリスの中国使節団が、結局中国との貿易協定を結ぶことなく失敗に終わったのが1794年、マカートニー使節団のもたらした中国情報は、中国に対するイギリス国内の関心を刺激したが、その後貿易における軋轢が高まるにつれ、イギリスとの公式通商を拒み続ける中国に対する反感も高まって行ったと考えられる。Robbins, 386参照。また、インドやアジア地域の情報を逐一伝える *The Asiatic Journal and Monthly Miscellany/Register* が、1816年に創刊され、アジア地域の情報が次々ともたらされるようになっていた。

³⁸ *Norton Anthology of English Literature*, Norton Topics Online, The Restoration and the Eighteenth Century Topics, Travel, Trade and the Expansion of Empire: Overview” にも、同様の指摘が見られる。

³⁹ 1926年版『台湾 (フォルモサ) 誌』参照。Kevak, 62も参照のこと。

<参考文献>

- Addison, Joseph and Richard Steel. *The Spectator*. Ed. Donald F. Bond. Vol.1 Oxford: Clarendon Press, 1965.
- Boswell, James. *Life of Samuel Johnson*. Ed. John Wilson Croker. 2vols. New edition. New York, 1837.
- Breen, Benjamin. "No Man Is an Island: Early Modern Globalization, Knowledge, Networks, and George Psalmanazar's Formosa." *Journal of Early Modern History* 17(2013): 391-417.
- Buffon, Georges-Louis Leclerc, Comte de. *HISTOIRE NATURELLE générale et particulière : avec la description du Cabinet du Roy*. Paris, 1749.
- . *Buffon's Natural History*. 10vols. Barr's Buffon. London, 1797.
- Candidius, George. "A Short Account of the Island of Formosa in the Indies, situate near the Coast of China; and of the Manners, Customs, and Religions of its Inhabitants." in *A Collection of Voyages and Travels, Some now first Printed from Original Manuscripts*. 4vols. London, 1704.
- Cottle, Joseph. *Malvern Hills, with Minor Poems and Essays*. London, 1829.
- D'Amalvi, Isaac. *Eclaircissemens Neccessaires*. Hague, 1706.
- D'Israeli, Isaac. *Curiosities of Literature*. Ed. Stuart Heath, 2005-2006, rev. 2011. <http://www.spamula.net/col/20160208>
- Foley, Frederic J. *The Great Formosan Impostor*. Rome: Jesuit Historical Institute and St Louis University, 1968.
- Hamilton, Walter. *The East India Gazetteer; Containing Particular Dextriptions of the Empires, Kingdoms, Principalities, Provinces, Cities, Towns, Districts, Fortresses, Harbours, Rivers, Lakes, &c. of Hindostan, and the Adjacent Countries, India beyond the Ganges, and the Eastern Archipelago; together with Sketches of the Manners, Customs, Institutions, Agriculture, commerce, Manufactures, Revenues, Population, Castes, Relition, History, &c. of their Various Inhabitants*. London, Printed for John Murray, 1815.
- Hug, Tobias B. *Impostures in Early Modern England: Representations and Perceptions of Fraudulent Identities*. Manchester: Manchester University Press, 2009.
- Keevak, Michael. *The Pretended Asian: George Psalmanazar's Eighteenth-Century Formosan Hoax*. Detroit: Wayne State University Press, 2004.
- Lynch, Lack. "Forgery and Performance Art: The Strange Case of George Psalmanazar." In *1650-1850 Ideas, Aesthetics, and Inquiries in the Early Modern Era*, Volume 11. Ed. Kevin L. Cope. New York: AMS Press, 2005, 21-35.
- Macpherson, David. *The History of the European Commerce with India*. London, 1812.
- "Memoirs of * * * *, Commonly Known by the Name of GEORGE PSALMANAZAR; a Reputed Native of Formosa. Written by Himself in order to be Published after his Death. Containing an Account of his Education, Travels, Adventures, Connections, Literary Productions, and Pretended Conversion from Heathenism to Christianity; which Last Proved the Occasion of his Being Brought over into this Kingdom, and Passing for a Proselyte, and a Member of the Church of England." *Monthly Review*, 1764 (31), 364-385, 441-454.
- Nieuhoff, John. *Voyages and Travels into Brasil and the East-Indies. CONTAINING An exact Description of the DUTCH BRASIL, and divers Parts of the EAST-INDIES; their Provinces, CITIES, LIVING CREATURES, and PROCUDTS; the MANNERS, CUSTOMS, HABITS, and RELIGION of the INHABITANTS. WITH A particular ACCOUNT of all the remarkable Passages that happened during the Author's stay of nine Years in BRASIL; especially in relation to the REVOLT of the Portugueses, and the intestine WAR carried on there from 1640 to 1649. AS ALSO a most ample Description of the most famous CITY of BATAVIA in the EAST-INDIES*. Translated from the Dutch Original. London, 1732.
- Norton Anthology of English Literature, Norton Topics Online.
<https://www.wwnorton.com/college/english/nael/20160107>
- Psalmanaazaar, George. *An Historical and Geographical Description of Formosa, an Island subject to the Emperor of Japan*. London, 1704
- . *An Historical and Geographical Description of Formosa, An Island subject to the Emperor of Japan*. 2nd edition.

- London, 1705.
- . *Description de l'isle Formosa en Asie*. Amsterdam, 1705.
- . *An Historical and Geographical Description of Formosa*.
Ed. and introd. N. M. Penzer. London: Robert Holden,
1926.
- . *Memoirs of ****. Commonly Known by the Name of
George Psalmanazar; a Reputed Native of FORMOSA*.
2nd ed. London, 1764; London: Forgotten books, 2015.
- Piozzi, Hesther Lynch. *Anecdotes of the Late Samuel Johnson,
during the Last Twenty Years of His Life*. Dublin, 1786.
- Pratt, Mary Louise. *Imperial Eyes: Travel Writing and
Transculturation*. London: Routledge, 1992.
- Proceedings of the Old Bailey, The*. 1674-1913. 2003- 2015
Old Bailey Proceedings Online, Version 7.2, March
2015 <https://www.oldbaileyonline.org/index.jsp>
20160104
- Robbins, Helen H. *Our First Ambassador to China: An Ac-
count of the Life of George, Earl of Macartney*. London:
John Murray, 1908.
- “Some Account of a Person Known by the Name of
GEORGE PSALMANAZAR, who Pretended to be a
Native of Formosa, and Published a Fabulous Account of
that Island; from a History Written by Himself, and just
Printed for the Benefit of his Executrix.” *Gentleman's
Magazine*, November 1764, 503-508, 573-576, 623-629;
January 1765, 9-14.
- Stagl, Justin. *A History of Curiosity: The Theory of Travel
1550-1800*. Amsterdam: Harwood Academic Publishers,
1995.
- Swiderski, Richard M. *The False Formosan: George
Psalmanazar and the Eighteenth-Century Experiment of
Identity*. San Francisco: Millen Re1991.search University
Press,
- Vairasse, Denis. *The History of the Sevarambians: A People
of the South-Continent*. Translated from French. 1675:
London, 1738.
- 陳舜臣 「神に許しを」『幻の百花双瞳』徳間文庫 1987
年
- ヴァレニウス、ベルンハルドゥス 『日本伝聞記』 宮内芳明訳
大明堂 1975年

伊藤潔 『台湾 四百年の歴史と展望』 中公新書 1993年
桐生操 『騙しの天才ー世界贗作物語』 NTT出版 1998年
『世界の奇書 総解説』 自由国民社 1990年